せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第168号・平成15年9月1日

年表で読む古平の歴史

《74》

学校教育

―明和小学校―〈1〉

■学校設立の陳情

明治三〇年代になると、鴨居木からさらに奥にも農家が増え、それにともなって学齢児童数も多くなってきた。浜町の小学校までは距離があって低学年の児童には負担であり、また冬期間や天候の悪い時にはさらに困難であることから、この地区への学校の開設は住民の強い要望でもあった。

明治四三年（一九一〇）、部落会から選ばれて佐藤吉助・中野和蔵・木村彦松・工藤富五郎・金沢金之助らの人たちがそのために手を尽くした。

■特別教授所の開設

部落会からの陳情を受け、当時の岩渕町長は、古平尋常高等小学校に併合になった元・沢江分教場校舎を移転し、取りあえず部落の要望に応じて、特別教授所を設立する議案を町会に提出した。

これは議員の賛成多数で可決し、町有地である鴨居木学田地の内の約一、五〇〇平方メートル、（四五〇坪余り）を敷地にし、地域住民の労力奉仕によって整地などをした。

七月に移築工事に取りかかり、九月二五日、新校舎が竣工した。この工事費一六七円については、住民四三戸が負担した外、高野常吉外の有志の寄付によってまかなわれた。

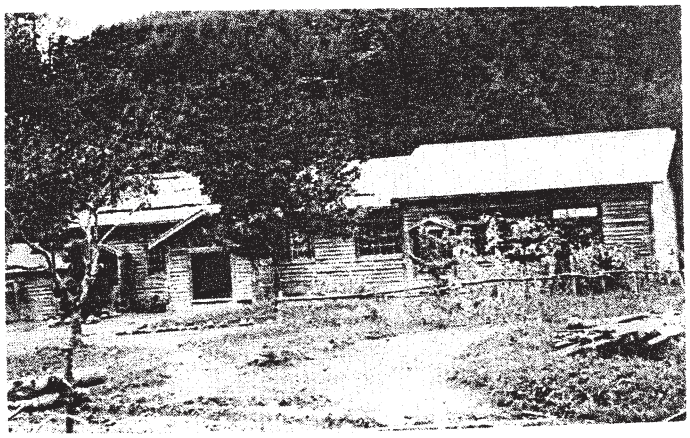
町の財政にも余裕が無く、特別教授所はあくまでも一時的なものであって、教室に机といすがあり、教師が居れば授業が行えるということであった。町の財政難の折から、取りあえずは住民の要望を入れたということである。

■一教室に四学年で授業

教授所は古平尋常高等小学校に付属し、一学年から四学年までの単級・複式編成で、主任には落合雄之烝が命じられた。竣工した翌二六日には開所し、就学児童は男子一二一人、女子一四人で計二六人であった。

落合先生は、児童の衛生についての生活習慣と関心を高めるため、バリカンやくしなど部落民から寄付を受け、先生が児童の頭髪を刈り、女子には髪を洗い結うことなどを実習させた。

開所から三年後の大正二年、落合先生の奥さんが代用教員として女子に裁縫を教え、その後、部落会からオルガン一台と唱歌集一冊が寄付された。



←後に増築された校舎（分教場）

←労力奉仕で校地の拡張作業　後ろに見えるのが開所当時の校舎

大正一一年

当時の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【69】

▼八月一四日

朝夕は涼しくなった。昨夜は丹前一枚では寒い程だ。先日来た学生三人連名で礼状が来た。内容も簡にして要を得ている。秀才は別だ。盆中で仏参りの人出が多い。注文していたたたみ表が着く。銀行へ行き、ゴザ代金を払い込み引換証を貰い〈モ〉へ届ける。夜、困へ蓄音機の新譜が入ったというので聞きに行く。追分、安木節など実によい。余裕ができたら自分も一台欲しいものだ。家中で楽しめる。平田君が来ていろいろ話し一一時頃帰る。アリに羽の生えた虫が沢山出ている。

▼八月一五日

六時起床。盆中で、父は早くから仏参りや新地方面へ行く。墓参の人は絶えぬ。リンゴを近所へ配る。生きのいいイカを貰う。午後から小雨で、町はごみがたたないので都合がよい。夜、墓参する。奈良先生のところへ校門のことで訪ねる。夜は蚊軍の攻撃がひどい。

▼八月一六日　（次ページ）⇦

▼八月一七日

起床七時、この頃店は閑散。大謀からも昨年は今頃相当に需要があったが本年はさらに無い。しかし今月末頃からはアバ縄の使用時期なので、五、六丸は売れると思っているが、その時は大いに奮発すべしだ。古平鉄道問題も、昨年期成会を設立以来、一二月に山口、高野主人が中西代議士を通じて依頼、その尽力にて今回上京し陳情するまでの運びとなった。近々中に山口、原田、米田の三氏が上京。中西代議士の紹介で当局に陳情する由。一筋の光明を認めたるは大いに喜ぶべきことだ。願わくば首尾よく任務を果たし、帰郷されることを祈る次第である。

▼八月一八日

起床七時、朝から雨風が激しく荒れ模様になった。鉄道期成会運動に山口、原田、米田の三氏が出発される。雨休みで倉庫の片付けなどをやる。夜、郵便局問題で信用組合に集まり協議する。暴風雨となり、電気が時々消えるのでローソクをともして協議する。一一時休む。

▼八月一九日

起床七時、支店の末子さん病気重体なので、昨晩は父と妻が二時頃まで見舞いに行っていた。一正大謀からアバ縄の値段の問い合わせがあったのですぐ通知する。昨夜、協議の結果、郵便局拡張問題について、私と㊀、㊁さんとで㊂と吉などに寄る。午後から学校の校門寄付の件で集りがあり行く。二八回生までの内一三回生分が集金が終わっている。私の分担した六回生は二二名で二八円五〇銭が集まり一番成績がよかった。五〇〇円は集金できる見通しがついた。校門は四〇〇円の予算ということに決まった。寄付のことで㊄、〈△などに寄り七時帰る。向かいの電気会社へ帝電野球団一〇余名が来る。明日、古平学友会と対戦するとのこと。

▼八月二〇日

今朝八時頃から雨が降り出し一〇時頃には大雨になった。入船町の㋑千場で、小樽から来た帝電野球団との試合が行われることになっていたが、雨のため中止になる。期待していた人たちも多かったのに残念だ。午後二時、吉井旅館で暁翠書家の書会があり行く。なかなかの能筆家だ。五時帰る。二十日盆の日だが、この雨ではなかなか寺参りもできない。いよいよ盆も過ぎたので日も短くなり秋らしくなってきた。

▼八月二一日

天気快晴だ。店の方は相変わらず至極閑散。リンゴは本年は一向に思わしくなく、どの木も実入りが悪い。五〇号などは毎日のように落ちて処分に困る。上等が一斤（約六〇〇グラム）二銭五厘、落ちリンゴだと一銭ぐらいにしか売れぬ。困ったものだ。せっかく高い経費をかけて全く閉口した。石河さんから電話があり、先月末から問題の ※

八月一六日 快晴 七十五度

今日八二条部落会長石河氏主催となり、浜町郵便局拡張問題ニ付、浜町部落会役員全部の会合を信用組合事務所に開催する事となり、一時ニ行く。石河氏座長となり色々議事を進める。主旨は満場一致賛成。運動方法ニ付色々議論百出す。結局、部落会長に一任する事ニした。新地方面よ里の反対運動は必然の事。大ニ対向する事にした。当日の花形役者は石川、横山、斉藤、湯田、米田の諸氏ダ。寿原君の発言ニ対しエビナ君の暴言には実ニ驚いた。四時終ル。五時、梅の、仲谷君ト予ト奈良先生ノ処を尋ね、校門の事に付協議す。結局、十九日役員会を招集、打合する事にした。夜は十六日の寺参り、客沢山た。本ニ行く。今日の郵便局問題に付色々話しす。十一時帰る。

← 日記の原文（原寸）

※郵便局の拡張の件、よろしく頼むとのこと。夜、関口前局長の通夜があり行く。ずいぶんと大勢の人が集まっている。故人はなかなかの人望家で有為の人であったので、人徳に感じて集まるのだ。一〇時過ぎ帰る。ずいぶんと蒸し暑かった。

▼八月二四日

起床七時、曇天であったが一〇時頃から雨が降り出す。泊青年団一行一〇余名が来て、学校正面玄関前で記念写真を写していた。来ていた阿波重雄君とも久しぶりで会いいろいろ話をする。浜町方面を見物していて私の家に寄った時、船が出るというので急いで帰ることになった。浜まで見送り、リンゴ四〇斤程送呈した。七時から信用組合で郵便局問題で協議会があり、拡張についての陳情書に署名、押捺印してもらうことになった。それぞれが分担して歩くことになったが、署名できないというところもあり、なかなか手間どる。雨が激しくなり雷も鳴りだし、暴風雨になる。

＜続く＞

札幌通信・第9信

新米書記奮戦記

吉川義雄

ふるさとの役場は、戦後も長い間、来訪者と職員の間が、窓口と称する木格子で隔てられていて、ガラスが入っているから用件を伝えるのには、一番下についている小窓まで頭を下げ、縁の下を覗きこむ形になる。

明治以来の官尊民卑の姿が、建物にも色濃く残っていた。

戦争から帰り、一番毛嫌いしていた『お役所』に鈴木安さんから強引に入れられ、当分休もうとしていたわが身の不運を嘆いた。

戦後の役場はやたら忙しかった。戦前、戦中の仕事を知らない私は、苦もなく順応できたが、むかしのやり方しか知らない者は大変だったようだ。

「民主」と言われ、「公僕」を強調されても、ハシをつけたことのないご馳走みたいで、その食べ方さえ知らないのだ。

以前通り、落ち度なく自分を守るために、事後の証拠のはんこだけが書類に並んだ。上も下もそれしかやったことがないから、何の変化も起こってはいなかったようだ。

私の最初の所属は、庶務・教育兼任の係。当時の古平には、引揚者や他町村からの転入者がなだれこんで来ていた。

受入れ手続きも、中央官庁でもやった経験のないことで、朝令暮改の指示文書が毎日やたら入ってきて、舌打ちさせた。

要は、豊かで美しい古平で、いち早く生活を安定させていただくことで、私は意を決して、必要文書の謄写版印刷を始めた。役場で二度程徹夜したら、受付文書は全部できた。

庶務の窓口には、古株の風間京子女史が当初の担当。鈴木主任の厳命で私と交替すねことになった。彼女は「代書屋さんで書いてもらって」と、「ハンコが無ければ…」が、窓口業務の不文律とし、頑固であった。

俄か仕立てで、恐さ知らずの私の窓口は、役場吏員の風上にも置けぬ、事務処理の仕方で始まった。先に印刷しておいた神に、聞き取りで全部を私が書き、署名してもらって終わるのだ。有れば別だが、ハンコの強要はない。これで事故の起こったことなど皆無であった。

この時期。もう一つ超難儀な仕事が役場に舞い込み、これだけは、私も毎日頭を抱え込むハメになった。

当時の国鉄は輸送力が極小で、旅行は至難のワザ。徹夜して並んでも、余市駅で切符を手にすることは出来なかった。

古平を含め積丹全部の町村からの陳情で、割り当て切符の枚数は、当日分古平五枚、美国三枚という極めて厳しいもの。他の係に属ささない仕事は全部庶務係と決まっているから、イヤでもやらなければならない。

仕事を終えて帰る頃、役場の正面入口には徹夜組が並びはじめて、私を暗然とさせた。

先着順ならこれ程楽なことはないが、優先順の方法は無いものかと、松岡助役、三浦収入役を交え懸命に知恵をしぼった。

結局、生命にかかわることを最優先としたが、判断を誤るとエライことになるのだ。

配券を終わってから駆けつけて来た若奥さんがいた。例の非情な窓口に身を屈して必死で訴えるが、私の力ではどうしてもできなかった。

身内の方が不幸な状況にあるらしく、静かな声で説明されるが、余程の悲痛が込みあげたのか、窓の向こうで声を殺して泣き出した。

配券済の人達は電報やはがきを持参したり、証拠だけは揃えていたが、明日からは全部を留保してから決めなければ、そんな後悔が私をしめつけた。「今帰ったのは○○先生の奥さんだよ」と誰かに告げられ、再び「しまったッ」と私は呻いた。新任の教師だが弟たちも慕っていたし、町から愛されている人の奥さんであったのだ。今もって悔しい想い出である。

戦中戦中

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後戦後

吉野慶一郎

暗い夜から解放されて　これまでは、夜になると電灯に覆いをつけたり、外に明かりがもれないように窓に遮光のカーテンを下げたりして、暗く暑苦しい夜を過ごしていたので、明るい灯火の下での食事は本当に久しぶりのことでした。

しかし、せっかくのご馳走も敗戦――ということを考えると、その味も消え失せてしまうような思いでした。親父が、

「今日の汁粉の味は格別だなァー」

と、敗戦という切ない思いを、汁粉に託して言葉にするのがやっとのようでした。

さっき母が言ってた、

「今となっては、もう蓄える必要もなくなってしまった」

それが現実となりました。

歓喜と悲嘆を一気に味わったこの食卓が、樺太でのわが家の最後の団欒となったのでした。

ソ連軍が進駐して来る不安　『ソ連が参戦』と聞いたときから、頭の片すみに、

「もしや？」

と、最悪の場合を懸念する思いはありましたので、

「やはり来るべきものが来たか」と、この事態を先ずは冷静に受け止められました。

樺太が大きな戦場にならず、自分の町も無傷で終わったことは何より不幸中の幸いでした。ポツダム宣言には、戦後は南樺太と千島周辺がソ連の領有になることが明記されている以上、やがてソ連軍は入って来る。明日からの我々の生活はいったいどうなるのだろうか？

ニシン漁も徒労に終わる　考えてばかりいても仕方がない。気を取り直して、ニシン粕の始末に家族総出で浜へ行き、炎天下、汗みどろになって黙々と仕事を続けました。

このニシン粕の製法は、樺太では以前から稲倉積み方式と言って、全体を細長い小型の倉庫のようにむしろで囲い、相当な風雨にも耐えられるように厳重に覆いをし、これで貯蔵庫が完成するのです。

翌日、出荷予定だった約百俵（一俵九〇キロ）のニシン粕は、当時の価格は思い出せませんが、わずか一俵（六〇キロ）の白米と物々交換しました。

大漁を喜び、人手と日数をついやして『獲らぬ狸の皮算用』を夢見ていた粕が、ちょうど乾し上がったときが敗戦の日となり、これで夏ニシン漁が終わったのです。終戦と同時にわが家を直撃した、これが敗戦の厳しい現実でした。

照り続ける太陽もようやく傾き始め、漁船が港に帰る頃になりました。その時、沖合いを北に向かって航行する一隻の貨物船が見えました。この時期に、しかも危険な北へ進むとはどうしたのだろう。まさか、今日の終戦のことを知らないはずはあるまい。気にかけながらも、無事に目的地に到着出来ることを祈りながら見ていました。

それと同時に、自分のところの発動機船が人を乗せて出港したのが、昨日、無事に酒田港に着いたと知らせがあり、安心すると共に今どうしているのかと、また新たな心配事が襲ってくるのでした。

壮観な落日に思うこと　沖合いの船を眺めているうちに、やがて夕映えが空も海もあかね色に染めました。太陽が真っ赤な火の玉と化し、あたりを焼き尽くすかのように輝き、それはかつて見たこともないような壮観なものでした。そして海に没する様は、全力を尽くした結末を思わせるような凄絶さで迫ってきます。敗戦の日本の姿を思わせるようで、今でも忘れられない悲しい光景です。

（続く）

古平いろはうた

も　もう一度逢ってみたいな羅漢さん

1

□秋田岳轉和尚の記録

戦後、特に観光のブームに乗って五百羅漢が全国にも紹介され、このような作品は極めて数が少ないこともあって、宗教的なことと離れて、貴重な文化財として広く知られるようになってきた。

この五百羅漢についても新聞やテレビ、その他の刊行物など多くで紹介されているが、その元になっているのが、岳轉和尚が記録した『創作油絵五百羅漢見聞録』で、種田富太郎の来訪を受けたときのそのいきさつが、一二枚の和紙に毛筆で事細かに記述されている。

□遭難、神仏に祈り助かる

先の『五百羅漢見聞録』からそのいきさつを読むと、

「大正八年一二月二〇日の夜、種田富太郎氏が突然来訪されて言われたことがある。

大正八年九月、古平で鰊の建場を経営していた種田富太郎氏は、樺太の鱒漁場を切り揚げ、家族や漁夫らと共に所有する豊国丸（種田氏所有、石油エンジン搭載・トン数不詳）で古平港への帰途、利尻島付近の沖で突然の大しけに遭遇した。小型の木造船は水浸しになり、いったん沈んだと思ったらまた浮かび上がってきた。

妻、長男と家族三人、漁夫二〇人が協力し、不眠不休で必死になって船の排水に努めたが、寒さに加えて食べ物も無く、ただ神仏に祈願し荒波の中で漂流すること二昼夜にもおよび、乗員一同全く生気がなかった。

やがて荒天も回復して辺りを見渡すと、近いところに、大型の汽船一隻が舵を損傷したのか漂流しているのが見えた。直ちに救助の合図を送ると、しばらくしてその汽船が近付いて来たので、一同は汽船に乗り移り、豊国丸はえい航されて大泊港に入港、無事に上陸することができた。

救助された汽船はソ連船であったが、その後不当な謝礼金を要求されたため裁判沙汰になった。結局、謝礼をせずにそのままになってしまったが、救助されたことを思うと心苦しく申しわけない。（以下略）」

と、遺憾の意を表しておられたとある。

□五百羅漢の寄付を発願

種田富太郎は、あの荒海の中で生死をさまよいながらも、全員が無事に生還できたのは日頃信心している神仏のご加護によるものであり、感謝の心をもって何かお寺に奉納したい。

そして、自分が考えているのは『五百羅漢像』である。それには、どのような形のものが適当かということになり、金額は五万円という申し出があった。その巨額の金額には岳轉和尚も驚いたとある。

岳轉和尚と協議の末、油絵による五百羅漢像ということになったが、どのような経緯で作者を選定したのか、などについては全く不明である。

□林竹次郎画伯のこと

五百羅漢の作者である林竹次郎は、道内の画壇では有名であり名前もよく知られているが、竹治郎と書くのが正しいようで、長男の書かれた回想記や、北海道立美術館発行（昭四九年）の印刷物にも竹治郎とある。ここでは禅源寺（岳轉和尚）の記録にある竹次郎としておく。

林竹次郎は明治四年（一八七一）宮城県に生まれ、明治二五年五月、東京美術学校を卒業後、橋本雅邦に日本画を学んだ。そして宮城県内の中学校や岡山師範学校、三一年に札幌師範学校、三三年からは札幌中学校の教師として、大正一五年三月に退職されるまで美術教師として生徒の指導に当たっていた。その後、藤高等女学校に勤められ、昭和一四年、五百羅漢の完成をまって札幌を引き揚げられた。

蝦夷萱草に寄せて

大澤文子

年々潮風に朽ちてゆくわが古家の玄関には鍵をかけることもなかった。あの頃は何処も平穏の世の中だったのであろう。初夏の頃になると名も知らぬ小鳥たちが、解放されただだっ広い玄関の天井をわがもの顔に一周すると出てゆくのが常だった。いつものことなのであまり気にもとめなかったが、「明日は雨になるかなァ」そんなことを思っていた矢先、「お母さん！大変だヨー」まだ学齢前だった次男の慌ただしい声に、朝食の片付けもそこそこに、手を拭き拭き子供の指さす薄暗い鴨居の辺りを見上げた。藁屑を丸めたような小さい塊が一つ。

それ以来、燕の番いであろうか、わが古家が巣造りに好都合だったのか、頻繁に出入りする様子。燕らは朝が早い。思い切って町内の若者に頼み、玄関の高窓のガラス二枚をはずしてもらった。

自由に出入りできる燕らは一層はげしく巣造りに懸命だった。それからが大変！　子供達は起こされなくても早起きがはじまったのである。オーバーかも知れないが子供達と燕らの小さな共同生活？　そんなことを思った。

やがて雛が孵ったのであろうか。父さん燕は一層はげしくガラスの間を出入りするのだった。何羽孵ったのか愛らしい囀りが頻繁に聞こえはじめた。時折雛が小さな巣から落ちそうになるのか、はげしく巣のまわりを鳴きめぐる親燕の声。そんな時「赤チャン落ちたらダメダヨー」子供達は一生懸命、でたらめの作詩にでたらめのふしをつけて日がな唄うのだった。

いつか日も経ち、子燕の囀りも一層はげしくなった頃、一羽また一羽と、晴れあがる朝空のもと、親燕のあとを追い飛び発っていってしまった。

二枚程はずした高窓のガラスもまたもとどおり収められた。

あれから初夏の頃になると、同じ番いが古巣を覚えていたのか、巣造りは続いたがいつか絶え、数年後には、わが家の子供達もそれぞれの思い出を胸に旅発っていったのである。

その頃、私はあの積丹岳のふもと高原一ぱいにみだれ咲いているであろう蝦夷萱草を見にいきたい、そんな思いにかられた。だが私は方向音痴、一人では見知らぬ土地は歩けない。思いは通じたのか、ふと車の軋む音と共に甘い声、

「ネェ、初夏の蝦夷萱草でも見にいかない？　今が見事ょ！」

突然の誘いだったが"車のひと"となるのには時間がかからなかった。

「窓からあまりのりだしてはダメヨ！」歌友の友ちゃんだ。注意を受けながら、車はまたたく間に美国を過ぎ婦美、野塚を走る。広々とした高原一ぱいに乱れ咲くオレンジ色の蝦夷萱草。車から降りこの草原を歩いてみたい。沢おぐるま、姫女苑の花々、その中に身を埋めてみたい。そんな思いにかられたのも一瞬！　運転手まかせの車はいつか余別町でとまった。

「あらあら珍しい！」歌友の金杉すみさんの笑顔に迎えられ、遠慮もなくお店の中を通り奥の一部屋に通された。しばらくは短歌のことにもふれたが、手早くご馳走して下さった素麺の味は忘れられない。またの日を約束し、再び友ちゃんの車は蝦夷萱草の群れ咲く中を静かに走らせてくれたのだった。

◇　◇　◇

いま、思い出のこの記事を書くにあたり、方向音痴の私のために余市の小竹栄子氏が、早速、浜婦美、幌武意、入舸、日司等々、そしていつか海鳴主宰故北見恂吉先生が一室に籠られ、お仕事をされた小樽茶屋などの写真を拡大して、即送って下さった。感謝！

私はいまこの拡大地図をなぞりつつ、いつか一人で積丹方面の奥まで歩いてみるかな・・・。そんな計画をえがきながらペンを措いた。

私はいまこの拡大地図をなぞりつつ、いつか一人で積丹方面の奥まで歩いてみるかな・・・。そんな計画をえがきながらペンを措いた。

➡ 会員の長寿を願ってバンザイ三唱

故郷「古平」の良さを満喫

再会を喜び合う稲倉石会

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

去る六月二十九日。

構想五年・準備二年を経て旧稲倉石鉱山の『会員の集い』が古平町文化会館で開くことが出来ました。

かつて「稲倉石」に住んでいた住民の心の絆が、三十年・四十年の空白を超えた今も、綿々と生き続けている事を実感すると共に、何時の世にも変わる事のない人情の厚さと、連帯意識の尊さを教えてくれました。

当日は、古平町の心温まるご協力と古平会員のご奉仕によって、華やかな会場が設営され出席者一二八名の心を和ませてくれました。

午前中に稲倉石を訪ずれた会員は、雑草と化してしまった住宅や鉱山跡地の変わりように暫し足を止め、往時に思いを馳せている姿が特に印象的でした。

『集い』では、青柳元鉱山所長の挨拶に続いて、本間町長さんが歓迎の言葉と古平町の現状を語りかけるようにお話しして下さいました。

数十年振りに故郷である古平町に参じたのは、鉱山社員の他に、協力会社の社員さん・稲倉石小中学校の教職員さん・郵便局の職員さん・商店の店主さん、更に、稲倉石小中学校の同窓生も参加され、まさに稲倉石村の再現という感がありました。

会場では、事務局が準備した会員名簿や会員の近況などの資料の他に、古平町史編纂室が心を込めて作られました『どっこい稲倉石鉱山（やま）は生きている』と題する鉱山の歩みを綴った冊子が配布され、大好評でした。

この日の再会を待ちかねていた会員の中には、九十才になった坑夫さんが、ご子息さんの介助で車椅子で馳せて下さり、参加者の感動を呼びました。

長い時空を超えた今回の『集い』は、道内の新聞社も注目され、北海道新聞と読売新聞では社会的にも稀有な会合として大きく報道されました。

『集い』は延々と続き、互いに杯を交わしての歓談は尽きる事なく、また、昭和五十二年に廃校となって以来、歌われる事のなかった「稲倉石小中学校校歌」が、教師と同窓生によって感激の大合唱も生まれました。

かくして、大絶賛を頂いた今回の『集い』に携わった一人として

「やって良かった」

「開いて良かった」

と自分に言い聞かせ、何度も何度も振り返っては手を差し上げる旧友と、心置きなくお別れする事が出来ました。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

⑩

橘　義春

―樺太へ―（続き）

幕舎へ行ったら、腹が減っているだろうとお菓子を山程出された。あるところにはあるものだなぁと感心しながら、遠慮なくいただいた。

盛岡の連隊では弟の敏夫といっしょで、ずいぶんお世話になったこと、彼は中国大陸へ行ったらしいことなどを話した。帰りには沢山のお菓子をお土産にいただき、戦友達にやったら皆大喜びだった。

―亜界川の軍道作業―

わが二中隊も本格的な土木作業につくことになった。古屯から半田の国道までの中央軍道の道幅を拡張する工事である。

古屯から国境までは一七キロで、この軍道は馬車が行き来できる程度の道幅しかないので、幅を三メートル広げ、将来、日ソ戦の勃発を想定して、戦車やトラックが容易に活動できるようにすることが目的であった。

（私達が汗を流して造ったこの中央軍道が、三年後の昭和二〇年八月、ソ連軍の国境からの侵入を容易にし、結果的にわが一大隊が大隊長以下全滅という、痛恨の悲運を招くことになろうとは、誰しもが夢にも予想できなかったことであった）

気屯から行軍で古屯に入り、さらに奥地の亜界川の辺りで幕舎生活をしながら軍道拡張工事が始まった。この辺はツンドラの湿地地帯だが蚊が多いのには驚いた。

樺太は大陸性の気候のせいか夏の日中は焼けつくように暑く、上半身裸の作業なので、メチャクチャ刺された。最初はかゆくてかゆくて参ったが、人間とは不思議な動物で、慣れというか免疫性というか、刺されても五〇〇円玉の大きさに腫れるだけで、全然かゆくなくなるものである。

初めての土木作業にもだんだん慣れてきた。モッコの担ぎ方からスコップの使い方、タコ突きのやり方、側溝の掘り方など、どうやら人並みについていけるようになった。腹が減るのは以前と何も変わらないが、作業隊なので毎日大きなあんパンが支給される。これが唯一の楽しみであった。

軍道の両側に広がるツンドラの草原には、見渡す限りピンク色の盆花が咲き、また夕方になると、原始林の緑が夕空に映えて空が緑色に染まり、遥か彼方に雁の群れが一列になってシベリアの方へ飛んで行く。こんな時に故郷のことを思い出し、胸にジーンとくるものがあった。

八月一三日の旧盆の日に、幕舎前の広場で中隊を挙げての運動会が行われた。中村中隊長が「今日はお盆の一三日で、地獄の釜の蓋も開く日だ。日頃の仕事のことも全部忘れて、今日一日を楽しくやろう」ということで、運動会で汗を流したこともあった。

軍道拡張作業も順調に進み、九月末に作業は終了し気屯の兵舎に戻った。

―気屯兵舎―

兵舎といっても三角兵舎で、電気は無く、石油ランプの生活で、暖房は薪ストーブ、水はつるべという生活である。

中隊の内務班は、四班まであり、一班と二班は小銃、三班は軽機関銃、四班は擲弾筒（てきだんとう）となっていて私は四班だった。班長は松本軍曹で、初年兵から古年兵まで二五名ぐらいいたのではないかと思う。

まずは冬ごもり用の薪の切り出しから始まった。最初は近くの枯れた松の大木を切り倒していたが、無くなるとだんだんと遠くへ行かなくてはならなくなり、電柱程の丸太を担ぎ、兵舎まで運んで来るのが大変な仕事だった。

＜続く＞

俳句鑑賞

お楽しみコーナー 9

俳誌悠主宰　水見壽男

幸平さんのこと

俳句のみならず、というのが福井幸平さんの印象です。少年時代の私たちにとって、幸平さんは左ぎっちょの憧れの町内野球のヒーローだったし、陸上競技では、短距離の後志地区の代表選手として有名でした。

その幸平さんが何時の頃俳人に変身したのか、そのあたりは定かではありません。しかし、私が平成十年一月俳誌・悠を創刊したとき、逸早く"嘶け"の一文を草していただき祝意の心を伝えてくれました。父を越え一穂を越えよとの激励には本当に参ってしまい心躍りました。

焦らずに悠々嘶け豊の秋　幸平

が、そのときの祝句であります。

じゅじゃ馬を駿馬のオブラートで包みあたたかい心と眼差しで、悠の前途を見据えてくれたのでした。憧れの人が、本当に身近かに居る思いを殊のほか強くしました。

俳句は一面、挨拶の文学、詩と言われます。存門の文学とも言われます。おはよう、こんにちは、おばんですなどなど、挨拶は人と人との心をつなぎ親しみを倍加させます。

幸平さんは悠・創刊号に、こんな嬉しい句を贈ってくれました。

クラークの大志ありけり秋天下　幸平

蝦夷に住み君の大志を祝ぐ秋ぞ　幸平

少年大志を抱けのクラークの言葉を今に蘇えらせ、しっかりせいよとの激励と、志を鼓舞する内容のお句でした。今、六年前の悠の創刊号を手にしますと、幸平さんの句の重みが心の裡に深く刻まれていることが判ります。

祝句の中に次のような句もありました。

聞き上手枝豆ばかり噛んでおり　幸平

まさに、満面ユーモア一杯の様子が彷彿とします。自然に微苦笑が湧いて心なごみます。

先生と呼ばれて外すサングラス　幸平

ここに諧謔という俳句の幅の広さを伝える洒脱の上品な心が在ります。どきりとさせられるような句意ですよね。

古平ホトトギス会の重鎮として、会を支えていただいた幸平さんの一端を一文に認め、俳句の奥深さを心の拠りどころといたしました。

編集雑記

▽「後の馬が先になる」ということわざがありましたが、『俳句・短歌集』の仕上がりより、期日の関係で敬老会の写真集『思い出のアルバムをめくる』が先になってしまいました。もうちっとお待ちください。

▽半袖のシャツを着るのも申し訳程度で、今年の夏は足早に去ってしまいました。海岸で泳いでいる人を見ても、見ている方が寒気のするような夏でした。でも残暑でちょっぴり暑さを体感しました。

▽学校は夏休みなのに、卒業をひかえた大学生にとっては卒業論文作りの書き入れ時、地蔵さんと地域の人たちとのかかわりについて調査したいという、北大の女子学生が足繁く来ていました。多くの町村ではそのつき合いもだんだんうすれているそうです。地蔵さんもやがては独居老人？　になるかも――。

▽いつもは夏休みの自由研究とかで賑う図書室も今年はさっぱり。普段の勉強に切り替えたんでしょうか。

▽話題は『火星人』で知られる火星の大接近でしたが、最大の距離の約半分にまで近づいたのです。赤い色から英語では「軍神・闘いの神」です。

神通力で慕われる 賓頭盧尊者

室谷忠雄

阿弥陀経という浄土宗のお経を読んだら、最初に如是我聞（にょぜがもん）という言葉が出ていました。この言葉は「私はこのように伝え聞いた」という意味ですが、釈尊の時代には、その教えは書き残したりすることはご法度で、暗記することが唯一の方法でした。

それで釈尊の教えを正しく後世に伝えるために、十大弟子とほかに大勢の弟子たちが集まり、それぞれの記憶を基にしてお経がつくられました。それでお経の最初には、如是我聞という言葉が置かれるようになったのです。

話はかわって、私は、子供の頃よく祖母に連れられて禅源寺に行きましたが、その時、いつも不思議に思ったのが、玄関を入ってすぐ左側にある赤い仏さんでした。祖母に聞くと、「あれはおびんずるさんといって、撫で仏さんだよ」と、言うのです。

ある時京都の寺回りをしていて、釈迦を中心にして十六羅漢像を拝観していたら、その中の一体に『賓頭盧尊者』というプレートが目に入りました。

早速、坊さんに尋ねたところ「賓頭盧尊者という方は、釈迦の最も信頼の厚い高弟十六人の中の一人で、特に強い神通力を持っていて、その力が一般の民衆から慕われている尊者です」

よく考えて見ると、仏教は釈迦の教えから始まっているのだから、おびんずるさんが浄土宗の寺にあろうと、曹洞宗の寺にあろうと何の不思議もないわけです。

今年のお盆には、お墓の中にいる祖母に報告しておかなければ・・・と、思っています。

古平俳句会

夕焼のもゆる神威の岬に佇つ　斉藤波留
読経の僧動かざり汗光る　山口悦子
夏の朝夜半の達磨の墨匂ふ　越野敏雄
塗箸と相性合わず心太　大和田絵伊
岩に散る飛沫観てゐる夏帽子　高橋重子
北国の母存すかぎり盆提灯　仲谷比呂古
向日葵の伸て咲かずや日翳（かげ）れる　室谷弘子
玖瑰（はまなす）や漁火遠くなりにけり　泉清三
弥生なり四方に光満ち満ちて　外山俊久
奥行の深き本堂竹の秋　越野清治
幸平吟
落ちる日の早さに夜長始まりぬ
ジョギングの帰路遠廻り栗の山
対岸に集まって来し烏賊灯かな

古平岬短歌会（夏休み）

池田テル

広き芝生駆けて遊べる園児らよ遠く住む我が孫思ひつつ
志望校なれど京都は遥かなり陽子よ今日は汝の誕生日
羊蹄山の残雪光る岩肌に湧く真清水の音の偲ばゆ
子供心に恐れ通りしトンネルは此処のあたりと海ぞひを往く
茂津多灯台より初めて見たる奥尻島かの震災の日を思はしむ

古平町史年表

17

大正12年（1923）

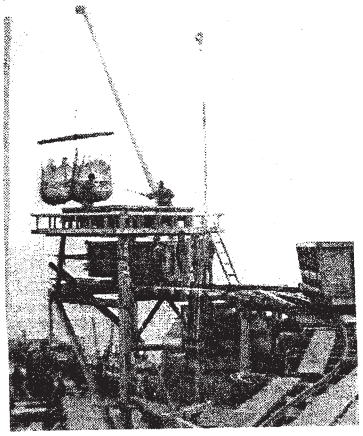
▲大正１１年度に予定された電話が２０か所架設され開通する。
▲浜町郵便局に電信取扱の許可が下りる。
▲日本海沿岸部に暴風、古平は被害が少なかったが余市で１３人死亡、増毛では鰊１万石程も流失する。
▲５月に鰊製品が大暴騰し、６月一転して暴落する。
▲鴨居木特別教授場が開校(5月)する。
▲余市から野球団が発動機船で来町、入船町㋑山口干場で古平チームと対戦したが、古平チームが勝利をおさめる。
▲新地分教場が隣家からの出火で、教員住宅共に全焼(11月11日)、一時、児童を本校に収容する。
▲折から丸山の高台に新築中の校舎が落成する（12月）。それまでは１・２学年の２学級であったが、４学年までの４学級編成となる。藤沢勇蔵・高野常吉・高野名石蔵が敷地を寄付する。

大正13年（1924）

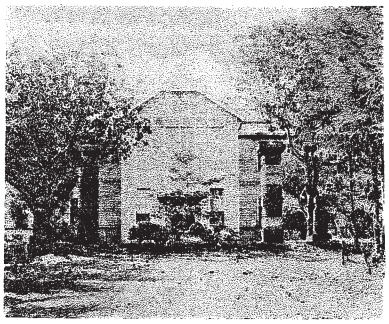
▲新地分教場が新築されたことから、群来尋常小学校を新地分教場に統合する。在籍数３１３名となる。
▲大澤吉三郎(戦後の初代民選町長)が道会議員に初当選をする。
▲㋑山口漁場で、初のモーターを動力としたウィンチを設置する
▲古平～余市間に定期船外浜丸が就航する。
▲古平尋常高等小学校増築記念に、同窓会が校門を寄贈する。
▲古平尋常高等小学校と新地分教場に、保護者会の有志６０余人が電話設備一切をを寄付する。(当時、古平町長の給与・月額１１０円のとき電話の架設料２５０円)
▲泥の木川上流の滝を「観音滝」と命名し、その周辺に霊場が開かれ命名式が行われる。秋田岳轉和尚の歌碑が建てられる。
▲正 藤沢商店が、延縄によるスケソの試験操業を始める。
▲古平尋常高等小学校で尾崎行雄(咢堂)の講演会が開かれ、千人余りの聴衆が集まる。この時、古平に初めて自動車が来て珍しいと大騒ぎになる。
▲町内で開かれている無尽講が、講元の不祥事から解散に追い込まれるものが続出し不安が広がる。

大正14年（1925）

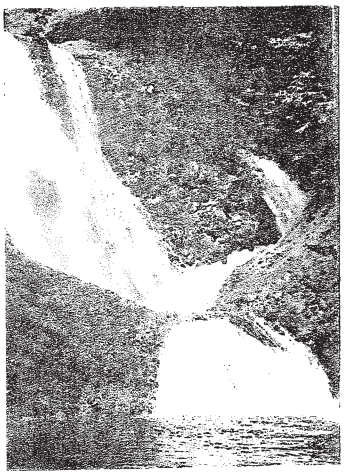
▲△(鬱・ｳﾛｺ)仲谷漁場では、初の蒸気による粕炊き場を作る。
▲鎌倉建長寺管長菅原禅師が來町、学校と禅源寺で講演会を開く
▲国防と航空思想普及のため飛来した飛行機が着陸に失敗し、浜町競馬場に不時着したが、二人の乗員は無事だった。修理の後小樽に向けて出発したが、小樽付近で再び不時着する。



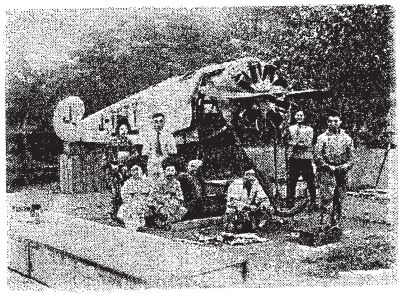
⬆ ㋑山口漁場のウィンチ



⬆ 同窓会が寄贈した校門



⬆ <観音滝>と命名する



⬆ 不時着した飛行機